

地震に備える

風水害と違って、地震は何の前触れもなく発生します。そのため、発生してからどうするかよりも、発生前にどれだけ備えるかがより重要

です。
地震は、十分な備えがあれば、被害を最小限に食い留めることができます。まずは、「住宅の耐震診断」や「家具の固定」から始めましょう。

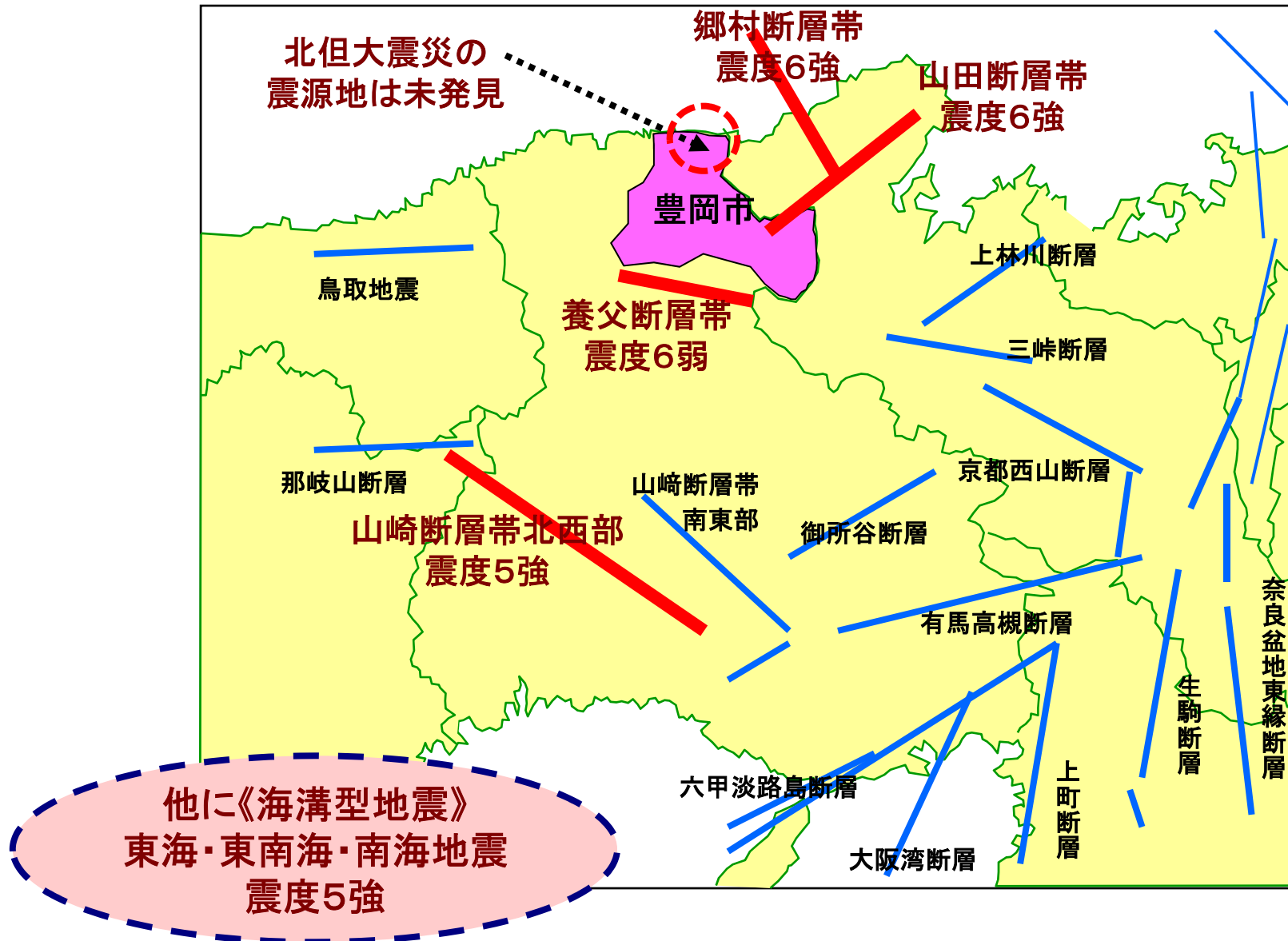
地震発生直後に取り組むべきことは、まずは「自らの安全確保」、その次に「地域住民の安否確認」です。

もし、火災が発生していたら、可能な範囲で「初期消火」を優先しなければなりません。

1 北近畿を襲った二大地震

地震の区分	北但馬地震(北但大震災)	北丹後地震
発生年月日	大正14年5月23日	昭和2年3月7日
発生時間	午前11時11分	午後6時27分
地震規模	マグニチュード 6.8	マグニチュード 7.3
最大震度	震度6 (当時の最大震度階級)	震度6 (当時の最大震度階級)
震源地	円山川河口部付近	丹後半島北部
関連する断層	不明	郷村断層、山田断層
主な被災地	旧豊岡市、城崎町	旧峰山町、網野町、岩滝町
死者数	428人	2,925人
負傷者数	792人	7,806人

2 豊岡市周辺の活断層帯と最大想定震度



3 震度毎の体感と現象

震度	人の体感	屋内外の現象
4	歩いている人のほとんどが揺れを感じる。	棚にある食器類が音を立てる。 電線が大きく揺れる。
5弱	大半の人が恐怖を覚え、物につかまりたいと感じる。	棚にある食器類や書棚の本が落ちることがある。電柱が揺れるのがわかる。
5強	大半の人が物につかまらなると歩くことが難しい。	固定していない家具が倒れることがある。補強していないブロック塀が崩れることがある。
6弱	立っていることが困難になる。	固定していない家具の大半が倒れて移動する。木造の全壊住宅が発生する(数は少数)。
6強	立っていることができず、はわないと動くことができない。	固定していない家具の殆どが移動し倒れる。木造の全壊住宅数が急増する。
7	飛ばされることもある。	木造だけでなく耐震補強のない鉄筋コンクリート建造物の多くが崩れる。

※ 震度6弱以上の地震は、日本のどこで起こってもおかしくない。

4 地震に備え準備すること

(1) 住宅の耐震化

昭和56年5月末までに建築された建物は、耐震性が低い可能性がある。そのため、まずは耐震診断を行い、耐震性が低いと診断されたら、耐震補強する必要がある。対象住宅は、市が簡易耐震診断員を派遣する。

(2) 家具等の固定

地震から身を守るための最も効果的な対策は、「住宅の耐震化」と「家具等の固定」である。これに優る地震対策はない。

(3) 食料、水等の備蓄

地震発生後、流通が一時的に止まり、スーパーやコンビニの棚から商品が無くなる。それを想定して食料・水等の備蓄（約1週間分）が必要。自宅が使用可能であれば、あえて不自由な指定避難所へ避難する必要はない。食料・水の備蓄は、指定避難所へ行かなくて済むためでもある。

(4) 防災訓練の実施

いざという時に、人は普段やっていること以上のことは決してできない。そのため、防災訓練等により繰り返し災害対応手順の確認が必要である。

5 地震発生直後に優先すべきこと

(1) まずわが身の安全確保

(屋内) 体を低くし、頭を守り、揺れが治まるまで動かない。

(屋外) 鞆などで頭を守り、建物、ブロック塀、自動販売機等から離れる。

(2) ガスの元栓を切り電気のブレーカを落とす

停電の復旧後に発生する**通電火災を防ぐ**ためにブレーカを落とす。通電火災は、電化製品のコードが半断したところに電気が復旧すること等により発生する。**感震ブレーカ**の設置が効果的である。

(3) 火災発見後の初期消火

同時多発的に発生する地震火災においては、市の消防力を待っていても延焼拡大してしまう。**延焼拡大を防ぐ**ため、可能な限り、会社で地域で初期消火に努める必要がある。

(4) 区民の安否確認

火災が発生していないこと、津波の危険性が無いことを前提とすると、**安否確認**こそが最も重要である。一刻も早く、それぞれの状況確認をすることが多くの人命を救う。現状確認なしで救助することは出来ない。